へ 5
5630
3

俳家奇人談巻之下

竹窓玄玄一遺稿　蓬廬書肆參訂

中川乙由

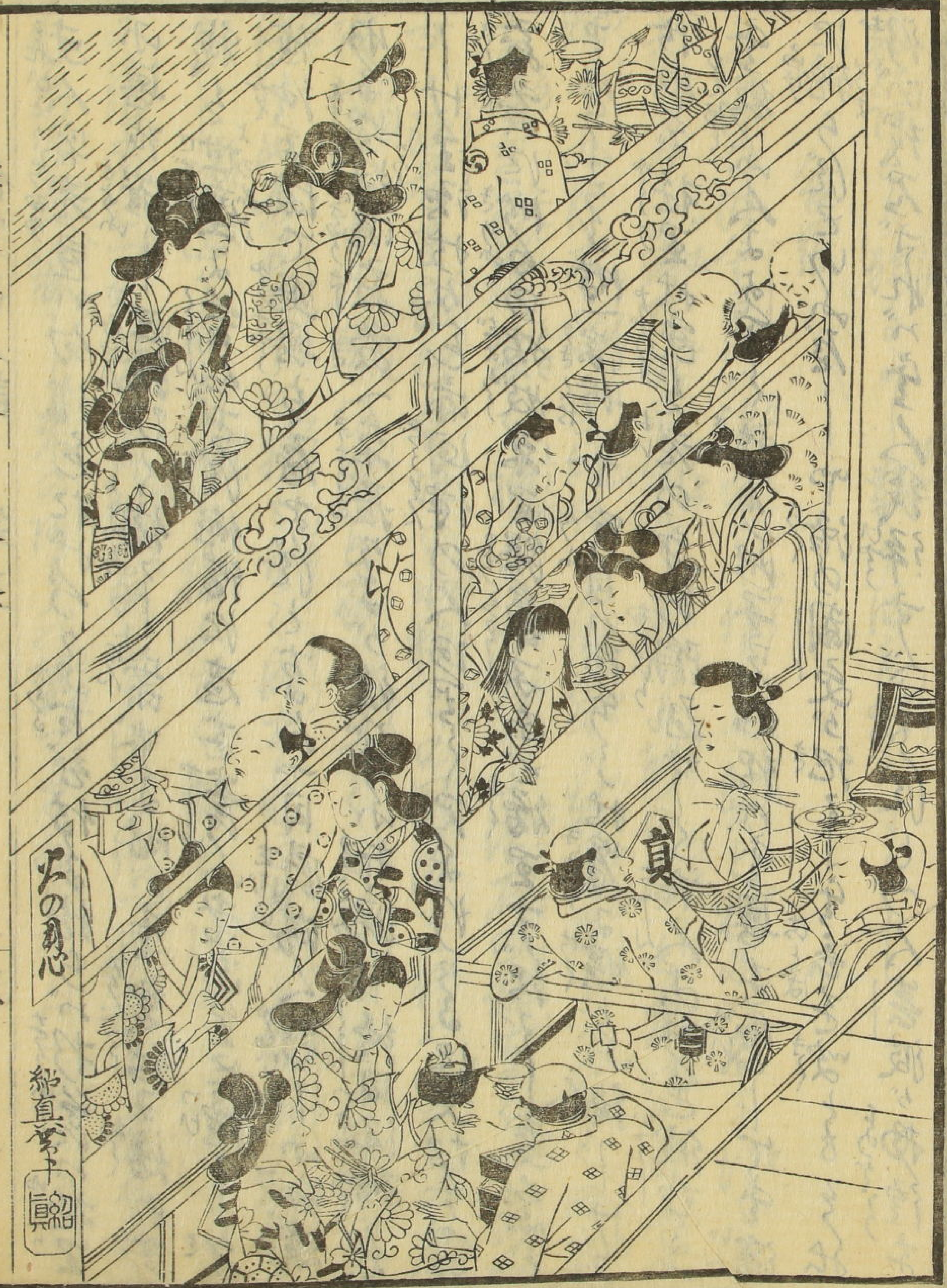
其先出ハ勢陽山田の社司たり姓名を變じて中川梅我また乙由と改む常に隠栖の心深くして凡人と會する事を嫌ひ庵を麦畑の間に営し自ら号して麦林舎といふ此子蕉翁の末弟にして支考涼菟等より讃せしが始めは口調を「蕪雑に着れはじめや飾縄「翹翹此扁に名を人や夜がろ「行秋を送く出ぼ紅葉の家「驚風さ鼻のかまぬ寒さの家「吟ちとも流れ玄沙や不風鷲て言字とるい「よ把柄を笑出しける山桜「栄花為栽と淋いの飛でも老後の謡作を不拘理言百の正風の玄妙を

へ5 5630 2
へ5 5630 3

得んと乞ふ為に或時麦林舎に案内して入来る客ありいはく
我俳諧を学ばんと志あれども其式むづかしく覚ゆ下愚の
其心を道に入べき手段は何ぞやと答て曰く志さへ深切
なれバ誰にても六ヶ敷ものにもあらず只文字に和して句ハ何様なる
事我申し侍るや答て唯眼前の風景を云得る事をありさまに
一句作て吟せ玉へ安からぬ事なりと望むに我足疾なれバ
霧かゝる暁にて竹人かよふ蕈ハいと寒げに濡打るゝ歩
行を指して行まゝ即ち発句の姿なりとて「百姓の霧
かくさげ行さむけり奈又附合は転変に及では尚此人の右
に出る者なしといふ家に云ふ門の高話は生一年流行を封ず
者にして支考乙由舎を催す事あれは点を争ひしに支考「老
僧の顔をいつくしみせて奥といふ妙句を吐くいかで此句に

点あらんやと冷汗ながしたるに釈教の時し何ひ宿と
執筆その句我席しこれが一座よろこびしき出ひたる既に
つれもて道行ほどに「拭ふて何と板ハかゞみにといふ句
あつり支考超我揚く「老僧の良我仏迦を見て奥と傍
是を詠む考答く一生此すご生句となふんる我悲む家彩
は妙句を惜む事なきいへりしいと興を深り生し或人曳の法
流儀は百韻に及るハいく門何の玄妙はいかりうやと尋ねしに
我をは左様なる事ふは償ひ支流く知んとならば先哲の
編おける書ども我形く見玉へと申ける是まと初心は世
間を害きて修行我芳一にせよといふ俗語となりくき云ふら
んも慈り又在里戯場を好むの癖何かつ人種くに諫むと
いへども更に吟入ぬ人に語て曰く我ハ沙つ何ふぞ俳諧沙味り

連中


貞
紹真寫
紹真

夫人容老ゆといふ句作をなせしかど古きを侍る然らば好み否は遊里
小唄を催し三絃ひく傍ら案ずる時は千変化を後れず
我も世塵に苦心せしが俳諧に志を書ふ老の身を終へし身
我好る所で遊興を尽すとて一日戯場へ行し時は和識
或娼妓隣座敷へ来居りしが後は折ふし打混じ終日酒盃を
しけるに浪花も亦同律の人なりしにより又むかふの
座敷に昨日の娼妓来て茶菓子など猶も送りすなど
申送りける時「浮草や今日は昨日の物に岸に腹ぐ縁じけり
とありぞ遊里に実と老の身を隠居すく古人おかしき織むるは
香敷ふ人によりてなりしの子といへ趣向を書て香深
に情らしといふ居しや浴の園交が続けり香を聞とも其
れは我忍ばれは金人我弾すべからずとつ人意波が操縦を

浪花にかへり諸かるより載せ添ても証とすべし

舎羅

元禄の頃舎羅は浪花に住して質と種々に名を換へる
者なり「蒲の穂や倒りて里なる軒の妻「沈菜花を見ふさ
畑や九月至る嵐を使ひて添芽が軒端を分けて両露
を漉ぎ並び我数く得とは実にし潰石の儲すくつまし
女と陋巷を求む舎羅の小枝その風流を俳人喫その店
我附ひなるに幸ひ羅も家をなりて同じ筆添まで渡り
続けぬ危急して後も空く欲事なこ字を飲食の設け
なし一枝懐にし何ぞ後ふさぐ物や得ると居留する
小鍋まで先く襤褸も貧家まかりけど此一物なし　儀や持
なある紙袋にし米の得ふば禁てまゐらせん是枝に因く

之(これ)を掬(はか)るに漸(やうや)く米升合ばかりありしとかいふ羅紅曰く其
米まで門人の口腹(こうふく)を害(やしな)ふなりしかすれば後悔なく徒(いたづ)ら
に経(え)ぬならせしに枝葉(しあまれ)なりしを其識量(しきりやう)の卑(ひく)きを
感(ゑ)じあへりとぞや或年此子より句空へ書(つそ)を送(すゞれ)よ
去(けふ)る秋更(さうこう)に狂吟(ぎやうぎん)して深草(ふかくさ)の陰者(いんじや)が庵(ふしど)に夜盗(やたう)
のためにとて宝(たから)はもとより持(こむら)ひも無ければ入だき所有
屋敷(やしき)に仕合(しあはせ)の方なき者まで訪(とひ)ふれども其ぞとも掛よるる
まや大きなる此更(さらづき)にくなりへば「盗人(ぬすびと)と酒が友は家なめら
微笑とまうして打(うちふし)中は古き在の地(ち)に居(ね)ら是
ひて「ぬすまれぬ手柄(てがら)を笑ふ何故(なにゆゑ)なりとて
其磊落(らいらく)なる人なりし

露川坊

露川坊は伊賀(いが)の人なり尾(び)の名古屋(なごや)にすみて芭蕉翁
の古老(こらう)なり時人(じん)いはく金城(きんじやう)に松枝有り護城(こじやう)に露川
ありと称しけりとぞや「有てなき角(つの)おかしきろや蝸牛(かたつむり)
「梅(わかおし)咲や先(さき)くるさとぐ也「聞(ぎやう)くし啼(なく)や櫓(ろ)の
音(おと)なる此詠(すぐ)「菊川(きくり)の流しも此ぼす雅案も亦浴(がく)発して後
私説(しせう)をかまへ異風(いふう)彼と共に濃(みの)の支考(かく)と此を論して
送(おく)まる文有り名(なづけ)て露川責(ろせんざめ)といふ川も返答(へんたふ)の書(しよ)を
作りて瑕(なざけ)を解(と)く是を名て合相掛(あひくさび)と号す

宮腰百里　附 琴風

宮腰なる里に魚(うを)を鬻(ひさい)て業(ぎやう)とす其旬(しよ)出此文(ぶん)に曰く我始
蕉翁に入りし時は茅風といひ後亭中に去らんて
三十六年又いかく蕉翁の教風仙風有り仙風を号世(そうせい)す

共に十一二年の友なり後嵐雪叟か命をうけ廿一葉にして
百里と改む今日に到るまで俳諧一日も絶ず二亭主の教
すまいし猿くはらぎは精工伎極門戸後世に教へれり踏
擢んでゝ髑髏沾徳主して云く髑髏のわふにも見ゆるを
露和後菜枝ての後と号よ室して舟れ部に入り此子家
為ぐ出に洞里を能くす安作がる梅の肉其耳なる喩
るに梅安宝し容代含して祉更す酒の卿人此望む
西とし定る時に経日経夜をとりんども安穏を及んずさ
安奢後にして風流するよう又彩の如し享保十二年五月
六十二歳にて死す辞世「弥ぐ金で涼き月をみるぞうし
安子葉宇寺す雑談にて里宝を続りて巧なるまた後世人の
知る所なりけり

琴風は難波の人何れの比よりか江戸へ来て蕉翁のつよ
ひそふ沙汰して後晋子に従ひ学ぶといふ如羅架と号ス
「ふくろふや眠り落たる柳かな」「宴食やいまだけなに子ほす猫
ら成ゝ「猫の恋鼠をとらぬ哀なり」「貫時よする白浪
垂まつり当時琴風百里と並び称せらる涼老く孤立し
隠里病で死す辞世「一息に此味ひを喜びぬ

深川湖十

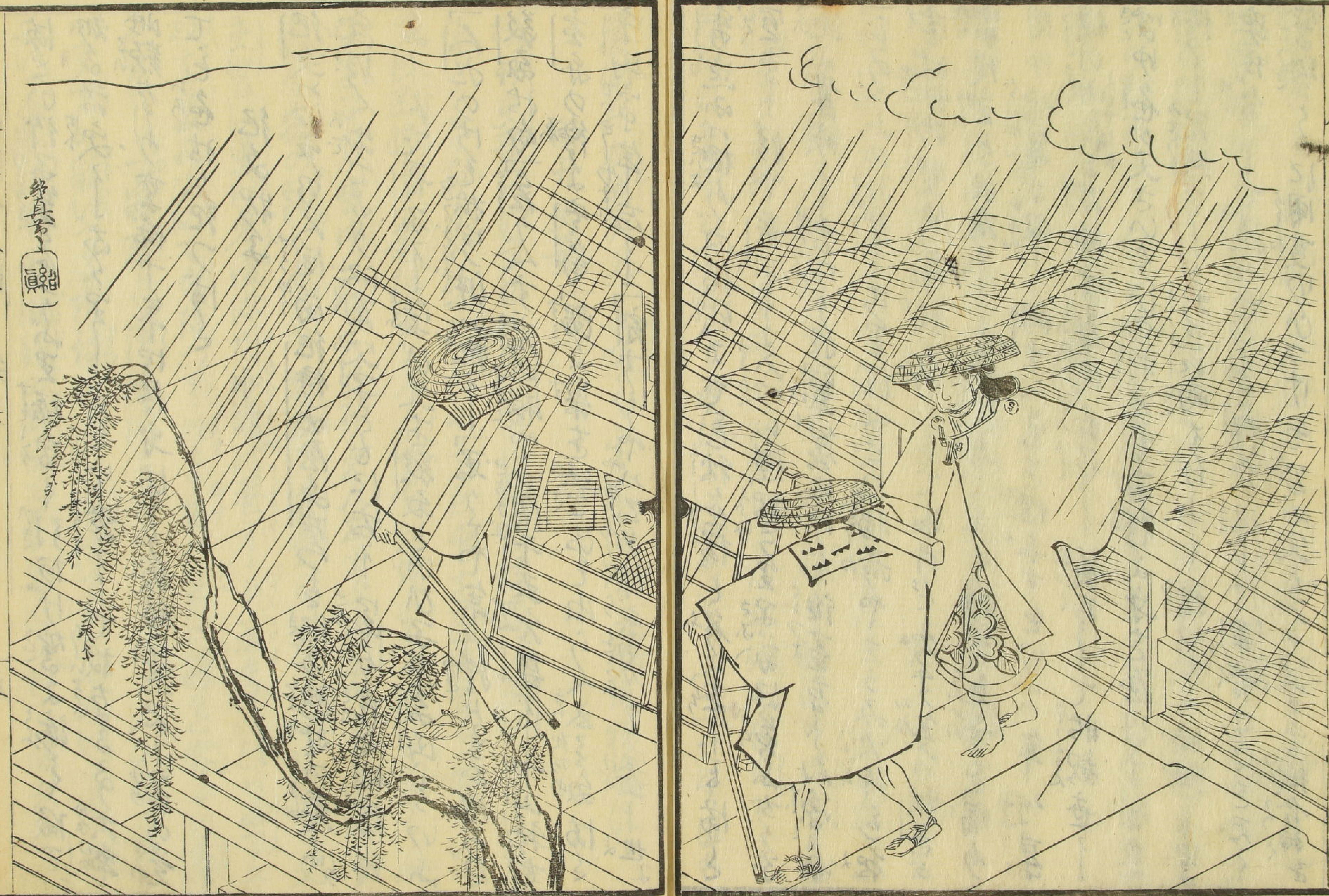
湖十は江戸の人晋子に従ひ業を受くはじめ深川に住して
より代々此號氏となり幼なる時に選山といひ後老嵐と改
名又嵐肝ともいふし「梅が香やめぐる生けめ井の端里
「志だらむも雪の念なり」「桃の花」「猿掛は母の手なし」「八雲霧林
畏の家「鷲坂の長刀はふる雪和狭ならふ此人容貌異体なり

落髪して髭のながさ尺餘身には法衣を着し頭には頭陀
袋を掛け里郭客懐の苦みて平生は経誦洞に
その性酒を好み天目にて酒一盃のみて度とせず醒さば
又始むなりし人その醒ることは時分るかなし元文三年
六十餘歳にして終れり

秋色

秋色は武江の人なり始め照降町菓子屋大目が妻なりし
時は雅秋といへり少より風流の志し有て十三歳の
春上野の花見に行て清水観音堂のうしろ井の端の桜
を見て「井戸端の桜あぶなし酒の酔」と其頃の諸つ至種
に物かしおはしけるが本くに附ける詩句俳句扱同くて
名ある甲乙を評し勝ひしにこの句おしなべて其頃に

秀逸には極りぬ後代までも秋色桜と名に立しも爰と
いふ其の頃「蚊屋や晋子も入りの時」と並ぶ女ら
遂に業成して「翠簾かけて」雄妻なるらん涼み
「とりふの紅葉にも比べ女とは「独居や」みいだし衣
末代俳諧史終年放蕩にして而世ず多くは秋色が
家残堂となりし其没後志ばらく河東点印を備へ
用ゆ晩年に及で凡十へ是を伝与すといふ一年何某
侯の山荘に召され庭園を筆記して眺望せらる
時秋色が父さいはひの折ふし身を屈しなる
傍らに見てゐしが折節雨すげしく降しば傍に驚る
輿残宮ども選らせらる秋色父の供して文蒼せ侍をみなく
驚帰どもに用意ひつけ其宿は父と入りて其紙合羽を


紹真画
紹真

或ハ竹の子笠かぶり裾高く引はげ驚に流く破里を知る者更になし　されど孝にて极なる大率此類なり　享保十年正月身まかりぬ　辞世「ちる一夢の覚ても色なき紅つばき

紀文親子

紀文ハ江戸の人　同苗紀伊国屋文左衛門といふ紀の熊野の産なり　武江に出てより以来父子ともに大イに富り　共に俳諧を好みしんで晋子に学び　父を紀文といひ子を千山といふ
紀文が句「人丸のはぎ松宮沖ハ帆なり「黒かみや年ハ経どもおぼろ月
紀文が句「蕎麦ハ人す老の眼や古開平五元集にあり　千山新宅
蜜柑の絵を題にて「隅に巣を鷺まそねらん皿紀阿め　浦き
千山亭年忘「割すゝや八乙女神楽男より盞一世よ

蕎衛比逆興のみを喫く当風流なる事并称を尽

桜井吏登

桜井吏登ハ江戸の人　嵐雪に継く　後京町周竹と云ふ人の高弟なるが故小鍛冶香点市を附与せられ此にいふども已に隠し老たる里となる　即ち之桃堂に譲る間く此子を以て雪中二世とし　神免人左右斑象とも呼ん
嘗て衆の勧によりて萄旦に嵐雪といひしが　稀なく又吏登に更む　老後深川北隠比蓬下居をし　頃れ又二枚を蔵みて出世つゝ枕を並が実に膝を容るの席とをくし　一室有く隠逸もおるれて到る人の入るいずれ先の客いづる待つて風雅するとあんいつも貧にいつも清し　当風韻の出世なる当時に和する作者なく

実に陽春白雪とや称すべし惜る哉老はいふ哉了一句
なし己数年の詠草を棄去て唯十八章を撰び纂ると
なん其「梅咲て何やらわれに云なり」「大竹や人をねむ
らす紀の六月「落すゝ紀粮いはのくと昭なり」「老の秋明
六を吹おもなし又自像自讃「おく露や何にそなれと
古苗子宝暦四年六月廿五日我沢く卒る

水間沾徳

水間沾徳は江戸の人其の磨工とぞ聞し時より俳諧を好み
露沾公我沾洲と共に其流れは風虎露沾二公に依て側に列りしが
一年 飛鳥井雅章卿に和哥の事により奥の岩城の人左近
時 露沾公の蹴闘を慰まゐらせ伽の老我撰ばせらる程
みな荒く数歳史にみゆる名公家上達のお手にい於きて

如何すべき紀と思案のおりから沾徳を進る者有り使ち召出
されて小く此旨諸星吹せ剃髪きて免く名我夜舟と改め
彼は三年など配所にかくしけるを翁夕に傍に侍りて和哥は
さき更なと俳諧なく露とぞ稀なく帰洛して其のめ
夜舟にむかひて因果るに洪ちなから和哥にご門に於けるべく
只俳諧のみを修行すべしと是生れながらにして滑稽の才
阿原すまんぬこし直ちに露沾公の数を受はしめ露沾公にといひ
後沾徳と改む日く夜くに上達し遂に一風我起し享保
沾といふを名く世に鳴り合歓堂と号す「元日も稼人
ある訳らぬ 後洲宿句にも一稼人も雑煮を喰へく又いろく
の在いすぐ付けを人ずらるやいぶかし 「百姓の家の涼
や檻花落「法掛けを思ひて網篭の落「水と羽と合ゆく
夕すゞみけ人能出よるて腹党に点加ふるとて餘朱餘毫揮

即揮毫といふ文字世に市に代りて今朱紅点を加ふる
事此人を始とす享保十一年冬六十二にして没す

菊呂治涼　附　何当

治涼は伊賀菊呂の人地名を以て性とし神名彦何と号せ
東武人来り一鼎かつにひとく南仙といへり後蕉翁治氏の教を受て
より治涼と改む其時の句「十分に治ふ雲や夜筑波その居を
翠下庵と号し南仙斎と号す「浮き川や谷の鱗者を持くむ夜
「鶯は遍照素性ならずや」「屋ねの一里と寒の夜明か」「茄子白は
か世に景色を見せく福寿草素より多才にして和漢に出す
博覧なり述する所俳諧綾錦百首実等あり江戸砂子吉原
竹種くの作何りく後人の為に其功称しつべし延享四年
神田に住く歿す六十有余歳なり弟何当継ぎ風流あり

野笠と号す句何某「齢ひ君が松かい行其の今朝札書

大淀三千風

大淀氏は伊勢の人一名鉅字友翰十五歳にして俳諧を好み性
敏にして妙を得らずす身を川々独吟すといふ三十一の時釈つ
くて呑空と名く延宝中一日に独吟三千句を吐く旬称して
三千風といふ寓言堂又無不非軒と号す「此ははや東人こそ
松嶋「笠に来よ巳笠のちる一葉か下回方に行脚して奥の仙台
に留る事十五年嫁して廃す人は為の又出く松嶋太微
北沢通に縁里住し此子を得名利のふりく三韓君にぬれ勤
進して雲地なし西行庵を建て小祐成が妻虎女の小像を
安置し鴫立沢を写く古法此遺跡と念ぜん年武江吉
鴫立沢をむかし名所に法なし玉つる神所なり 教勅を蒙

畢し後己知あるがゆゑ名高くなるハ屋をおもふの狡猾なるなしや
其時の口号「一声や犬猿引にかゝぎる昼より夜ゐる人
此咏けると京の同所にて碑を建て東往居士と名称
其引捨の道を逃て江戸にありて此句紙明を命名とす
しかしこれ遺言吉里辞世「今日ぞ昼見ぬ世の振れ夜ぐく

立羽不角　附　辰角

立羽不角ハ江都の書人なり里しより不ト゛ひつふ入り桃翁に
ふして雑談せり云所此句「けし坊主本の端でさし等の端
松月堂と号す虚雲秋菊菊舎ともいふ又千翁と称するを
つ子千人に何彼なるよしか名京より出るを得ずに学び画ハ猶
其しる句ら求む初め家翁しける時嘗て冠里公の法諱
に得し悦る之且慈恵お傳ふすなとて「法雑煮やならばい

なげゝる言語れ表として奉りける頃年忠友公執政の職に補せられ玉ふ折ちは喜悦斜ならず是より寵遇なほ厚く武陵公「箕は夜や長居をふかく子の道と戯れの吟詠に懇て「竹の露を立ば加しさまためだこけれは世にも気に遠く評判よく次第に繁昌して自ら千金を富裕なる是正徳の初め萱場町より濱町に移轉する時諸才に借錢を附てと云出して「六月の晦日家職はらひの家居をなく京橋通りに地を求めく稼居に於て官家より江戸中の居宅城丈を造らる居し法酒江戸のる使ち其角に従ひ志てく蔵造中を成たまり幾程もなく類焼して数年蓄を遊ばるなすと我失いぬ我まども有磯海きよらん家名今世に行はる此人元禄中に法橋に進み享保中に法眼に昇る俳士に法眼とばかり出したるは此人に限れるなるべし始め宝井男原嵐飯倉町小河家の養子となり始は禁錮むつかしとて其出きし法を繼く「雑星火」いふしりへして洞の家又「けむいめ我すれば麻布安井坂の家絶たりまた養家へ帰りく八十まる迄辛苦ぞ晩年居我新治橋つかに移す其沾変風して一流を家に己我化なると称す諸人の知る所なり宝暦二年六月九十二歳の壽を終ふ辞世「宮塚は素なる裸て一返しけり

大高子葉

大高子葉は播陽赤城の士なり我沾徳に俳を学ぶ同日に居けくいざ花は我れも山桜「初がりは江戸の若子を四季の汗芦角あ主君の家臣宮城を守らしる人は句我集ふに一種の大名や

句後今千時落士囘心して復讐の暁がれ方へ縮る也
其後も彼是は豊音背本意は何茂様は堅並又帰依は在
はや年来は繕言に居成は一通り書写人中は栖を抛者なり
所存の節難題此今暁存立中は踊は在は客情彼是ハ
生く世く小及ゆすにしは在人「山我影ちるも採て松れ
當獨く去帆竹を同じ往ふては滴泉をは存の如ふく
は君借名蒲座中を文ゆて番経打捨並中は一句は引導奉
頼は　十二月十五日　子禁

沾徳先かく

降る年は去今飲崇小て追悼發句「ますは色醒濡梅は免ぞ
りる沾徳「かる」此幸子師を洞り宗匠聞「枝葉侯で名残の雪
は光りる沾洲「雪骨は名を雲小あ泉云霍りる貞佐湧き友人

沾雲称を吟く「沾を梅は文武具ゑ茶湯手向の色を子禁岩よ
茶るの残滓し夜くもぞ又ゑの句作おんる茶枚出来よしとて枯俗
へ重宝せし　里恩斎蕭士何某の沾ふ尺らり

加藤貞松

加藤某粉と岩翁笠智は人武出なりし伴賀の產ころとの八組ちり晋子を師ふて風
韻は嶋の猩々庵と号す好る文学を修く学ゆ又覚見和尚よ
從ら禅宗我修す初め若かりし時伊賀玄阿洲津小遊ぶ稼
上勝さて往せり虎渓居士と自称す老後落語人あふく宗助
と号豚此子の子は箸の人佃房の寄り所ふあり比翁と亙考すびゆし酩「頂くし水は雪りも杭守「待
宵や翌は命を望のまと主灑落可思當く妙ふ古れ俗來て
骸骨大画賛我色ふ書より秋は斜め漸きりもあれり「羨示
や秋は蛍のふて月みつ筆を抛て辛がは寸人此句をもりて

辞世と為といふ時は寛保二年なり
京にも個斎と称る淡海八幡の人なり京松に波斎に事ひ生涯
酒を好み家業を慨怏す口調すこく人に縋倫す「強く
死ぬ鯨く肉不足家「初雪や葬り塚出の形みなり世並なる
俳士の属には何も及ば些りけらし　栄国子此句によりて宴に題す

松木淡々

松木氏は江戸の人晋子に従ひ俳を学ぶ初め渭北と号す
時に其角広仙窟が淡々に改む大に鳴ると其後自ら覚て半時
庵淡々と改名し祇園の辺りに住し仙窟と和萬して二題
人此耳目を驚かせり全体英邁の才ありて業権を及び
京都大名後を極め重宝係る此法名旧才に展ぶ江戸にては羅
人草稗もつ子らし淡遠すまい奥洞意其の撰で人々も影　七

俳諧此句ぶ世残ぶ弘さり「沢蟹が春蝕む蜘蛛の為なり「蓑葉乱
汚れば思ふ人が年一夜よせ句を記いちて此古斎をなく老
衰にかけくいひ下の句は二月中旬に似を筆ぬとさいふる古々
残ふまんてたと表との物ひよ又をいるる何ましと云残居し
たる吟詠なる時に宝暦十一年霜月八十八歳にして歿
す旧来宿を何らかじ自死する月を定し病中「朝霜や杖
で画がれし名士名山と作世並しが時月符合と伝を
亦素なる世此子はじめつみふ出の句そて「梅此落あらんて同
梅の花そのつやふ示して二丈なし世拳し暁る老なし宴
に吳綾義至席といひる俳友何り此子祝み其後その墓所に
一宿しに梅二木といふ句を碑に彫つけらせ其を不くぬ
て梅落の句解したまとなん云あるる禅家問答するよ

法して作麿生ろ先の営ハと問ひ附答くむ先ハ営と有也
ハ後名づけひさ紹まえし言樂轄すき称すべし

菜園女佐

菜園氏ちと先了我といふ遁隠して平三翁こいへり晋子
ハつくの名を平砂と改む平三翁後よ女佐（おふ斧河女佐中川女佐河か濁国すべし）
僧る菜さ時と号す「出しく三日人なりいかれ猫の恋「鯨ちか国
ふ役に入ゆる牡丹ら京「神風やちぎる自こ野むさ稲れ営「蓮
洩きの鱗も穂よある今日ハ降人と成り女名律義すし
て人多く積み集涼ふうんづく子葉（大高源吾治徳つ）春帆（冨森助右衛門）
白砂（吉田忠左衛門）竹平（神崎与五郎）等と深く交れり附そ元禄十二
年三月浅野家殊子阿里く彼数家ら三才へ有意して
高信を絶しおり言民友人に衛られ涌く豊至而く拈

うらせしみふ営竹平了お合ひ緑く久に拙がる里し椰遅く
ハ世吏もりやむりしに整らば継琳しむいや平答らく
遅くるふ実れる可りくし今の絶交さ里と依て了識こ恩
ひ交ハ若く安まこなり我螺して中直し彼ゆふせんなど
穫る語彼よ嗜ら里名付をしくもまおきこれより
絡まで巡礼して江都へ坂里来涼を年ハ幕友屋橋
素帆よ行遅しが近郊は京都より帰里ける迄てまくて拙
徳し拙処者凌ハ句き里とて一瓢でゆる手つまたぬ
凌ら子又子然が句をどむし什等いひで可ふんや依いり門庭
おりしちんご答へ五おれぬ季より三日すぎく子野
へ汤にまり里しみの来る人はくは峡秋浅野家の舊臣大
安樂舍しな而吉良家の籠く亡君の鬱をまりて思ひ

四馬 五笋 六龍 七雛 九雅

番勝

懐紙勝

四 一点

五 一点二半

六 一半

七 二

宝三存浮字

一日長安花

萬國衣冠拝冕旒

珠

金綺 蜀江錦 呉綾

俊　亀背　不角

米　大極

長　蒼溟

豪　龍漢

田雪

新月色

同文錦字詩

花影上欄干

所玉晴斎　朝陽館

卍峰庵

金枝玉葉　贄

家ハ里にも徒党勢を殺害し此暁ぐさに閑門して引籠りこ
云ひしとき途くまで拇ハ先日春帆が送りし発句の意すゑこそ
旧人とも必らず其中に浅彼じて湯一とのらず其形ちなり
直ちに言纏ハ野里或酒舗に入りゑじ一樽を彼ねらば
すかわり今路あすまに含辛ひるすゆゑ債ハ指来らず後日
お遠ちなく掛ケ置し其質として此羽織ハ質に入ると
何某侯より拝領の物ぬひで巻し己を泉岳寺に行つまに
いたり言葉を此中に家老也やお庭ハ大なる庭や生涯
康酒よねらせらし逸せて為んぐと呼びよりて　寝家より
警護ハ武士にまさ東里門戸残らず入ぢ里なる主すぐ
なくてつねよ知らくしが其深切や通じけん其中に知家
人ありて大に感じ其侭捨置ぬよ歴ぬるすハ宿ごてぞ泥と

風せし在俳ハ主意我喩り後の何某侯の御鏡に洩ざりし歟
や大屋にてや上れバ予盛に前人ある何用事ぞやと大屋に
答く今脇をかくれすまで御紋附の羽折を質物に入置し
ゆゑ年の内怠らずけや上盛なりて冷汗流りて居しより
歟いとおしく思し召其の節実なる我称美し玉へると云ぞ
又或時野分の句にて「何事も事起野分始といふ十二文字我
江より出れども上の五文字を並み見り打苦酩酊坊
来りしに談じける事に付いたく評分の主意の十二文字まて
家より字数合せんとせしが二級を渡く悪きなんとて見て
依て十二文字にて野分の一句を定めんとや此人没後に
子其の遺書に題して野分江と名しと見ゆゑなり享保十
九年九月六十五歳にして世を去る辞句ニ「中秋よ思ひ知らり

盈十三夜

沾耕舊室

沾耕旧室は江戸の人梅翁の風雅を慕ひ俳諧に鍛錬なり或は
酩酊坊ともいへり身の丈大にして人にすぐれ之を驚る者
天狗坊と称せり生涯酒を好む一句酔興して或激
論家の許に立寄るが面白起る時に出て遊場よりめ紀
のくだりと試合んする我打ちむかひ容貌の気く激しき
我感じ此月宮に立合しむ室何の苦もなく打すゑ
られ右ち立てる人を投出して「夕立にうたれて絶る田面哉
皆ま我弟子掛銭しある時なりし只我猿く宮
くご又その風流ある者笑しとうや席より夜分より帰る
或酒席より酒いたせよと呼べれども豆腐のいとまみ乞

用ひ来りしや露ぞふね煙なり室蛙なかで雲の出
「遠のても噛拘ハ来し鬼も分式年に三輪に「日本紀や天
地一枚阿けの玄まく孔子君賛「聖年をまれ已ちくしの私
さ梅いく釈迦の賛「達磨」北実のこんど変りふ和父の本そ枝
亀の家太率然頼なり

梅従

梅従ハ伊勢の人はじめ鬼を売く業と事せり生来俳
諧好なれんで非風籠と号せしと古老守武を尊ひし
家に住し其附合ハ己が長ずる所なり一年加州に趣
せし頃金沢にての発句ハ破達なる体おもる時「う月む
けく兵北体みを住してある又「判案ハあれど咳気しで
居るといへ俳よ「ありしや旅捨らい物を盗すれく然る又

字を北頃寮は本しの詞と称ぜられしと云なり是より加
陽北俳諧大道に行れ其人ハ梅従が風に変ずといふ後よ
京家俳人我妙として其附合の旨趣を頌けり今其集を
閲するに「酒はなと十日の菊も嫌ひて」とあるに「裏の紀
氏が来て寝家又「天狗ハ古中はらぬ反躍されくといふよ
「伏看一通り清盛でいふ又「寝藤物種ハ灯り紀頃てくるといふ
に「米揚人阿門の家覧いれてわくと何ぞも梅従が附句なり文
筆けるハ珠の里しかども句体よ得る所の滑稽まで称嘆
すべし

弄睡巳人

弄睡者はじめ竹雨といひ後巳人と改む江戸の人其角よ
従く俳をふ中法京師に移住して鄙周窓と号す「往くも

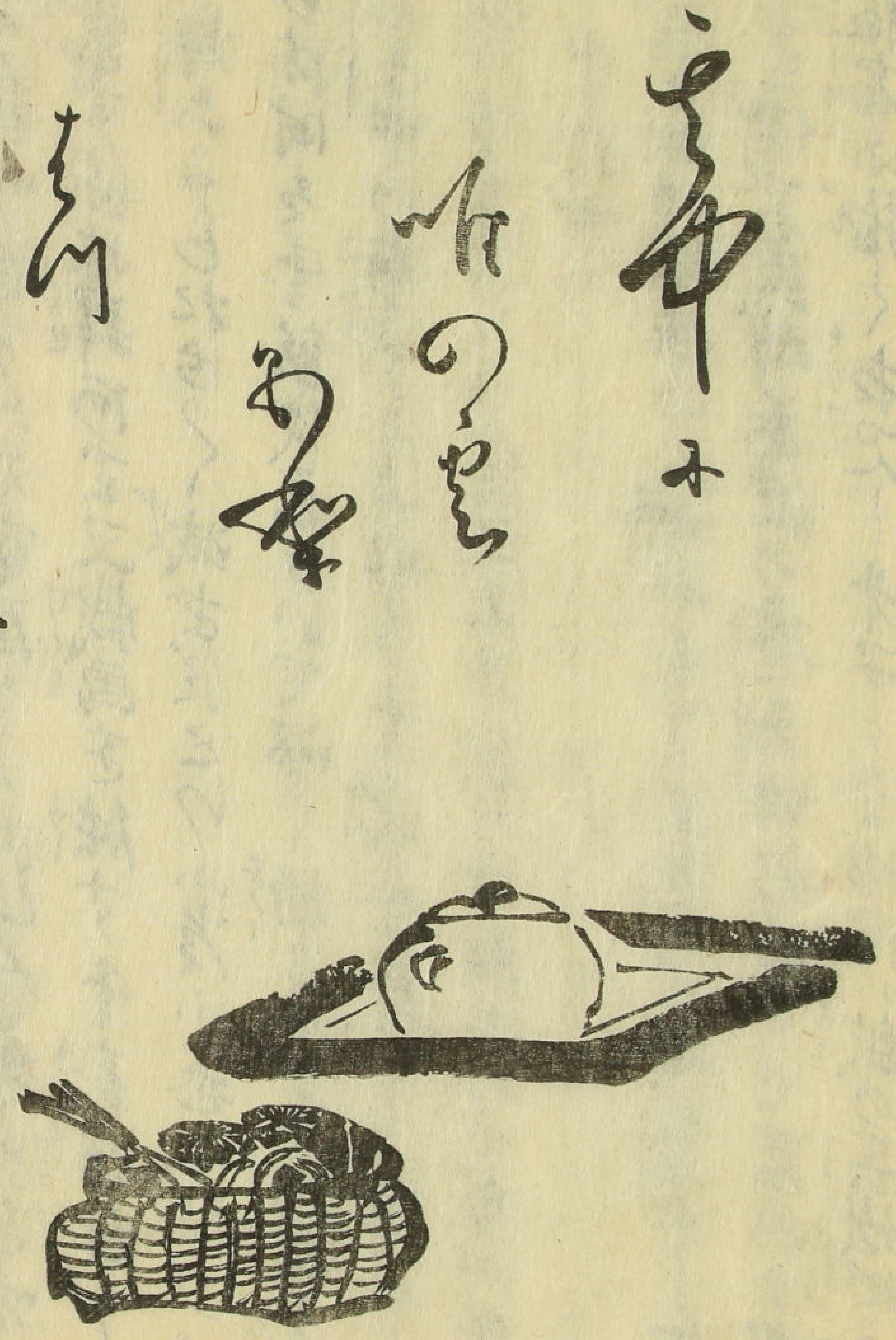
るゝと流布の本芽ヶ所に芭蕉翁蘇臙脂花の什三曲を笑ふしく
一茂図らば「野菊や風に吹るゝ天は川」譬喩を此句の如く亦
何ども婿んや「鳴あがる河越は蝉の目刺ヶ所鴨緑餘景眼中
に在りし「女房を縫や親世が響襲の中煙を移す「一夜
づゝ渉は替る時雨ヶ条「狸ほや鮮魚まつりし紀に落葉窟
二句とも和平高雅その老後は武都に帰りて夜半亭と
号し法名を宋阿といふ寛保二年六月死す齢六十有六
辞世「こしらへて有とも知らじ西の奥

堀内仙鶴

堀内仙鶴は武都の人沾徳を師とし宝永中京洛に遊びて
羅人と名を替る後は的斎と号し又長生庵ともいふ「狗子
の目ばかりつちりと照る雲「雨嵐鶏に秋風ぞ吹く海雲の星
「紫陽花の中合に咲にけり西洋より大象来りける時
「今や引く富士は裾野の虹牛　此句哉　邦乃大徳哉譬
喩せり称嘆をせずんだ有ほかなりけん茶事を嗜こと古
器を愛す癖は有ほかなり又戯画をよくす画を能す重ね毫巧むり　此
玄園許六とも是に比べて減ずといふ岩が巻中に抽んづ紀
事あらば則ち云毫餘ゑ紛る画を画及第といふ
仲宗室事の故なるによりて文事の事多く種あるる
人は及ばざる所なり寛延元年十月死す七十有四歳

千代女

千代女は加州松任の人幼少より支考の門に遊ぶ考死して雅
事の師を得ず其時美濃の盧元坊行脚して来れる折
それより師範に就く才子と成絵画は越の呉俊則に従ふ



上手なりし或時画讃を下に三階まれし朝顔の画
画をよく画く雪下に「朝良や地に咲ものと絶ばかりかこ
言印妙きんぬ居し始て支をかへさるる時「浅ぐろきすがね
又横笛初譽里我子を失ひける時「蜻蛉釣今日は何処まで
行しやらと愛情然を述思ふべしはど先哲の乙由此女此才
へ文学しける端に「落ちぬ身ハ鞠なり流柳か女此女の許
乙由此才へ文学しける端に「落ほぬ身ハ狂ひよ紀柳か双才
同時に画を出く同し浅露屋よ遊しける千代女ら能
文様及そる句を考振よ我と同案なれども狂の一字の鞴
なの流に及ばざるを嘆休さり雲遊返なふる事を浅さ我の退
後よ尼となりて素園とゆふ遂に佛道修するより
和なしらぬんこ裏唯一心の道我「百なりとも蔓一節かな

より當時俳諧はさかんなりといへども此佳境に入ことの少なし

山口羅人

山口羅人名を蛙牙斎と号し又法雨山ともいふ若き時は淀の浪に往居し後ち難波にして炙風を發起す嵐山にて「驚ゆく竹や枯れ人の初櫻」寺中なる洞をおぼえて暑さの頃「竹を木とも人は疑ふる雅なり」「雷雨月や壬江の鐘も聞ゆ」など凡文の法翁鄙の俳家残句を一廣に合して一昼夜萬句を催ふす後に号残らく老樵窩といふ蛙牙の号を譲りて門人羅江にゆづるとなり此子はじめ檜扇屋庄四郎といふ書肆なり素より家富といへども天性時務に疎く次第に衰微し業残廢して此道にのみいる蛙牙といひ羅人といひ卑下の名を知ぬ宝暦二年五十四歳にして卒ぬ

横井也有

横井孫右衛門尾陽名古屋の重臣なり性淳朴にして文雅を好む俳諧にも長じて世に獨立し常に人に譲く同く我に俳諧の沙汰なく又門人をもなし唯正直なる小児の情ところに云ひざせるがおのづから五七五に妙なりしと俳名を也有といふ「松風の里何変まででぞ師走り」「生姫の縫縫が祝ふく雉の声「昼良やどちらの露も百に会ふ」「嫌嫌いつ迄で草かくれなり」一年松木淡々が己を高ぶる里人の肝腰ると傳へ聞て初く對面して「作物の生耕あらり枯をば不言識んなるすむ大概此類なり又述する所の鶉衣も浦の梅鶯文法小説箸の俳文なの實体にして鼓舞自在なり比類なき理より先哲を踏て之を稱きり今古に並ぐ鬼世に棒

よろづ事に就て其人の風流を知べし

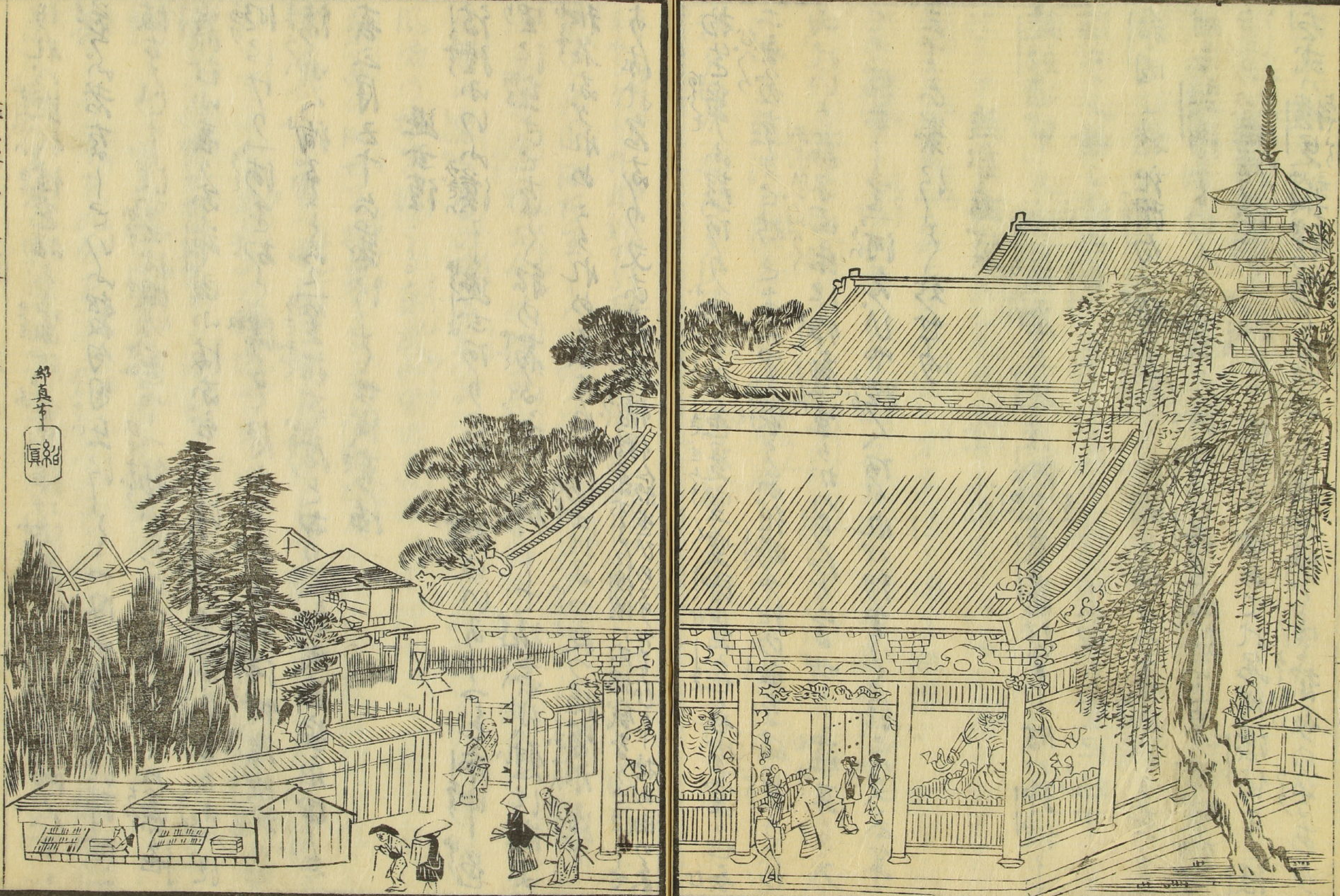
清水超波

清水長左衛門はじめ味噌商人なりけるが風流の志ありて一人の己が業様厭ふ一日儀にして参かろしく家役の己と長之宗を合して長臣と改む於ち嫁し妻嫁が許へ付ひ行けり流おどろいて汝何がゆゑに妻姿となりけるやと問ふに臣世栄之を頃いて我身の如きものを器ふ流すといはく世の産なる紀老たる心思しと今汝が才をはりなる俳諧には敏なるべし家が経りて従ふ臣しと役ち其佑が才人連ゆ紀嫌してつ人とかねみりて流が名る所おりを遠ざけ遂に一世の作者となる超波と改名して独歩庵と号す「水の音」に家を続けず神が月に「腥はまびの物を積みあると堂織りなし又仏を護る」

物生草に殺あり仏あり即色是空空即是色色空空色無二無別なりとおもふ人皿裂ちるが紀略が紀の血なす臭きを山臥いふ茄子田楽に作り麿生かからんと言ひ出し霧耳入て一瑞出して「河えびや陸へあがれば紀鬼し」と文五年三十六歳にして死せり

建部涼袋

建部涼袋は吸露庵と号す初め名葛胤なり時は轉坡うり仮なりし後に洛の百川が門に入り従ひ数句を賀に招しく希因に逢ひ附句は勢れ趣く梅路に依る一年が西に在し時に江国ともいひ式の浅草に居を卜してより涼袋（浅草寺門前）安風俳の器を家として改さり俳諧を廃めて此名を綾とうしてき名けり古式の後足ちやうらともいひ画を好み寒葉斎の号あり


紹真

されば近代伎を語て爰に残せり浪華にて淡々と呼ぶ人あり
並ぶ者なしといふ發句自在にして一風に拘らず野坡に
於ていひし「晝の坂の夢や一筋いとのつる」「村くれ茶袍
霞む小寺の宗寿園に於て詠じし「浦ゆかる千鳥も瀬ぞ
明にけり」「海を出て濡るゝ月白や五月雨」浅草寺の鐘の時
待ろく人洵するとき「窟にも出る」といふ人初時安永甲午
春三月五十六歳にして世を去る

遊女浮

式亭にいふ汀よし遊女なりし我朝のいつしかも市中邑
里に在をも云ぬく舩の宿る心を群して極表我慰にあるよ
和名あがれめうかれめ多なれめ海士の子一夜づゝ流る浮水逸なり
よ傳ふ名あり又古い我傀儡棄するに傀儡は木偶戯なりと注して
今般はひのやなりしかり掛妙西の家

より人形流行し多く遊女の人形を造り出しけるより轉じて本末なるものあり形を製する名に拘句撰の附録し詳かにともいへり古
昔より風流を好みし女は古今の間に後撰の撰に拾遺の宮本
伺白露新古今の妙玉葉の初君なるもの近世江戸の吉原
の勝山宗女等の歌よみなるは殊く多く我まくらひに拾ふ
風流の称を得たる東武の里の遊女は古の何ぞや京など
蕉翁の時世の撰集にも其句載られざり或時むつまじく
浮世合たる男へ中言したる者ありて契りも見えぐなら
んとするに「恋死なば我塚でなけ子規」とよみてちりし時人
後世の俳諧加賀千代女と評せり同じ所咲容の來らざる程を
詠じて「男な紀寝覚見えたまいし坡状の宗同く深き人
笑して卑下の心を「其数にのるも月かし髪の菊枕後嗜
衆の誇りを競ふ女なりし平生慈代の紋を附したまひん

京里と罵つる人に答て「あふ坐なる守に似合し花茎ならで
難波の怪めに京にかし述懐より「我形を眠門風に京桝越前守
臺雲里に前門といひし女ありおくかよひある男ありて
二夜三夜宿らで晴ざらに成る我打ふみて「行水の一睨で
ありや舟お溺来れ怪め何かし或時の吟「思ふさまと積でも
山路は宿ならん京何まの所れ娼妓ならん多分とくる者らの
実情とせし初は「我をのきて曲輪なりでせん中おなじく藤雲
「初雪や誰が跡と見て門夜毎同じく「嵐」「夜寒と人ままとふる
洞の京ての種情ある情ならしと従容よいと聴しくぞおはく
侍る

俳家奇人談巻之下大尾

玄玄居士略傳　　男　青青　述

先人竹内玄玄一は攝陽高麗の生にて性成臺にして病ぐ
明誠実に時「同西加古川の書家たる人の俳諧へ導かんと
折まふ折ては勧らましか吾身窒苦瘠色を見る事病
たゞは何を思ふとも甲斐なふらんと答へし我左京恩
ひそ尚書にいまだや生老独墨心眼の明ならんまを抱
病なぶ者の活する所京の床臥しとて「いまでみるがみる
京の月の色と喩へまし一句に感激なせんより「暑むす起
疎く風に驚くと振附て里へ一千里を一歩より
るとりんば仏掛たらんは京で宗匠ども便変に頻らずにと
直ちに言つまのく「朝露やあれ枠に成りかなるまゝ
一句我咄しより従く小籔の紙筆を費せ里折

執小重寳と交遊して道を討論するまと他事なし一世
趣向ある者を出ては諸国を経歴する此志あり潜に亡父桜井の
聞に遊び酒を嗜さと十余年去りて武の江戸に来り深川
に居を卜し常に河辺の房吾山に随ひ俳事を談ずる事
茲に一年ありて又存義買明が桜門に鶴口が徒と数を校す
集会す明和中官句當に進み京橋の西溝治衛に職を
居を宿せ新といひ又竹窓と號す「此鳥も何かいつか秀
渇まりの「種小屋」も清学の河辺や此牡丹「画は水の水に
成けり秋落風草肉生春もちんとさ一宵は中の春や五条より
三河よりに遊後春に遊く「人ばかりが死ぬといふかし」是は
春中とし「孫の顔見ずに許さん秋茄子といへるに翻案して
いはく老小唱ふ秋茄子見の汁に播まぜて椀に盛とも嫁

に喰すなと是姑は嫁が悪での事と人おもへり左に何ぞ臣
生々編に茄子は生寒利あつて女まのを食すまじげ子宮を
損ず本草に見えたる氣を動し中を冷し経を縷る時は是継子
は生ぜずといへりと歎ての謗なりと或人その俳諧に淫する
を嘲る者有り解く同く杜氏に傳癖庾公に銭癖あり道
盤秋僧知は庵んまと成智者なれども芋ぐしら我好めり
我俳諧すけ体を下手の一癖なる屋し又圓和歌にも嗜して
或時菅谷正臣ぬし人に道は夏ぶと問ぶて申し送られ
「行秋の染ぬ本は禁はなけれども紅葉はおみぢ落はつる
之夢らぬし哉し「落るもみぢ未だ初しほの衣は既に紅葉いろ
捨人よ露も時無も落は濡する所の斎なかば紙に濡何れにも実にありけるされば思ひ侍る又至誠
志把りに学んるを我深す成り儒士を学業に道く諸玄

我儕ぜし如く妻女家事を司りて和漢の傳記我讀しむ是
身は不明を顧ず古より始め今末我人来てより人の困窮我
救ふことなかりければ其身の浮沈をも亦交斜る歟ハ爲る
君が金銀を借りて貸れし人は資用に指だとつらじ諒てハ
有餘を換し足不足我補ふハ天の道なりとて歴較なる事
なきが如し文化改元の年中秋廿五日我ゆくく拗ゆり
享年六十有三谷中長久院に葬る

春日有感　　儀洋散人

庭裏有梅先人常愛故詩意及之

忽逢世上物華移逝者如斯歳月辞庭際嘗聞言分道一篋
中徒見詠餘辞梅花似雲閑空地浩雪若梅感舊時無奈
寔前人玄裏春風今編憶支離

玄玄府君與余有舊臨閙指含宿草是懇

賤以寄竹子得　　南総　勝謙

孝子甚何似周鄒恩豈平敬恭桑梓道次賡風響聲遺稿
傳時俗纂編肆世名因君追慕切此儀法難鳴

題俳家奇談　　水戸　森庸軒

父遺此書子剞之風流道義具于茲詩歌不及俳諧抄披巻
直逢花月師

たらちねを我失ひし照る
もしの玉まつり月見てり　　竹内亜朝

中くに今日を迎へて家の魂や昨日に増添ふ土は教く

其父の追福を亜朝ぬしと来て
まうしきかしくて　　江戸　嬌擔拔

出お起し玄れ禁艸や末をとくなき人思ぶ種とこそ承ら世　　水戸　岡田一琢

存き人の言は禁まくく思へとや見し面影も露の形か枝

言湊　菅谷正匹

十年ばかりみし面かげを露の月に月白ゆく手枕芳菱

居湊　岡田光令

賤あれば絶えぬ縁を安濃の浦などきのふ人のいふめしく

安楽隠玄々居士

牽牛花や
きぼゑば
又の
朝がほけ

玄玄男　音青

うつむいて見ん涼が月あけの露

玄玄妻　不英

露の月に十筆ばかりの秋を泣て

短奇行下略

この世に玄里したらちきの玄おける文ども折く五巻六冊の草紙となし成ぬ程なり夕爲まに老へ侍るとまつりし此いやはし通ゆ相し年月や竹のふしぶしに續涼思ひは昼十あまり三とせの居するまなんぬ此れば醫の才弁先れし骨子がいまみとばふんずれど俳諧すける生意にめで豪よりも識れる君よ篤く諸邑風客で一句のを恵まんにまた梅林の一枝崑山の片玉のしく業成への手向やつ加まふ牽なのごとく之に涼さとふんらし

あさがほや手あの竹よ涼そんども

書青

諸国名家追福発句并拾遺 野芳不拘次序

篠原はいつも紅けして竈馬なく　江戸 完来

時雨は中々もれくや河きはつゆ　同 道彦

並木の露はあれども丈なかばほ　同 白斧

初秋や村雲はなげ地蔵はし流　同 五世 宗瑞

古んなの日を昔にす帰る桐一葉　同 葉石

粟飯はさゝげ秋の月日加賀　同 冥麦

露を秋と定めし人を墓をしき　同 午心

墨染の袂にいそひし金銀の音　同 望来

せみは売又すずしく鳴や秋の蝶　同 仙鶴

水の月んす浪して吸けふかわ　同 晋門

三日月の隈にさ咲む蝶菜の家　同 永之

浮世をも巻とるいろじほされば　同 成美

○

おゆうげはいざ物ぐほうす手向の家　同 平秋

夕暮や物おもはす家暗き古ゑ　同 四碑

咲く流の名や物数のむかし今　同 鳥冥

○

嵐尾芭はあや弘誓の船のまみ　同 四世 一漂

月浩は涼ある様よ秋のつき　同 三世 左鷲

琴は声の数ゆやそふしもそぐ流秋　同 二世 崑山

みのむしや今も世をりきを帰る家す　同 五世 貝佑

芭蕉はなし実生をば箕べくも　同 五世 士志

松風に十三代続の秋ゆかし　同 二世 存義

水尽ればふかうげ行り秋のかぜ　同　二世　乾什
人は身に萩の上風おぼえし家　同　二世　紹逸
蕣や利休が好と飛鳥川　同　三世　提亨
末の秋の水とてふかう流ふ雨ふる　同　三世　多映
截筋しかりハすまどたの霧　同　佛外
むざ抱けば縁人末ふかり秋は暮　同　六世　瀬十
雖はこぎれたのこ絶まつや水のおと　同　二世　永機
ねる良や時もある種のたむけぐさ　同　百案
霧や霧十緒あ流里は石ぞいろ　同　亀貝
萍や玄何かうを今と咲く　同　三世　平砂
いなづまや岩まくだけく波の中　同　逸我
○

我さ月る煙りたん此秋のたそれ　京都　蒼虬
たふまね居りや顔は月ふしき　同　宣雄
葉は香やまづし花家をあぐさむる　同　定雅
それしろわうちに戸ばん秋の月　難波　月居
何まつて今日ハ蓄らど木様が花　同　其和
何さがわや家を一日萬丈はし　同　奇淵
それなべ名は追とつて丈よ紅葉ぐは　伊勢　仕高
老麻や時びと志ありも類恐紅　近江　烏頂
雨戸まで光らす家や葉の露　河内　来雅
花すゝき夕ぐれがたのつらね里　尾張　無韶
けさまでも名るや落る月は花　同　竹有
枚ばかしの庵里みる曳ぎ流こ哉　三河　卓池

名月や影をつゝまぬよもすがら　同　秋挙

め覚月はからば老ぬ屋し　甲斐　可都里

山里やまださはしさも京の形　同　嵐外

拾ひ得のかゝるぞかりぬ鳥の声　越後　鶴嘯

山の井の水汲に来て菜のはなし　加賀　其谷

寝ころ起て手拭が濡しやけさの秋　信濃　素檗

中くに人もむまれて秋の暮　同　一茶

いろ紙しや遊ぐ帰る秋あきの山　出羽　葛三

客から出でてんれんどろ消ゆ　下総　太節

七夕を殺でもちらし涼風かな　安房　杉長

青空や芝ゝさむき鶉がつく　陸奥　乙二

なが紀秋や起く仏をさがし鳴かず　南部　素江

米多く持くはびしき紀像かな　同　平角

蕣の花を去らするをちかぬ　岐阜　雷沙

虫売はまだ出ぬ露の花こそかな　豊後　月化

初秋のたつ紀やすし淡のされ　長崎　鶴風

魂送る客は知らせ務ひける　肥後　笠竹

おもひ涼る身もなりねど桐おちて　安芸　篤老

稲妻にかきくらと寝る笹屋かな　松前　布席

いなづまや猫りおちく涼棚かな　薩摩　蘭叟

附ていふ諸国英士の秋詠おろひ入といへども其の許多なれば秦胡道屋だくわく句残す彼是ひて此中にあつむ

蓬盧青青先生撰目

一俳家奇人談　全三冊　出来　竹窓玄玄大人遺意　青青先生　著

一續俳家奇人談　全三冊　同　著

八条園寥松先生補校

前編奇人談の落穂を拾ひ近代の名家蓼太白雄闌更暁台なんど
おにおゐてろうたる俳諧の法名家一人ことしの如くこれの伝を詳にして著く
あらはすべき俳諧とあげ古人の風調を窺ひその胸中をたゞしむ且夜半翁
の画かれたる蕉門十哲像並に発句皐月平砂の選者の図に筆勢少しも
あやまたずこれを模写してその外様々の書画縮図にゆするのなかれは古人の
書画鑒定のたすけにもなるべくすべて初編にいや増し興ある書なれば好む人ゝ
よろこぶ君子のよびかけもとに古今にまさる書と沢筆之

一椿年画譜　和人物之部　全一冊

一同　二編　人物花鳥虫魚　草木山水之部　全一冊

俳家奇人談跋

於是風流に於る人心諷ありかな
言ぬまゝ末をあやまちて又
あまたの道ありて憐き老ちを結
ままふる事あるにて其中間に
し撰事世にちりぬ志うし情実の
おほかたを知るれはなかむとつ
奇といへる人きこえぬくらゐの

ちかくはそれ〳〵の好めるすぢ〳〵に
清し此編にあつめ侍る數許な
志らぬもの見るを讀るかたの
よくおもひ出侍りて式いふ
志をまつしかとも力一筆を添ふる
序とす

雪中庵老人

完来

おほよそ古人の多くて其家趣をうしなひてそのたくひ哉
いつ見るにあかぬより實に古人を友とし
たのむへし發心集撰集抄隠逸傳なとみなそれなり
往年竺法子三熊海棠氏あまねく閑田老人か
筆をかり畸人傳おほく編をあらはして大に
世にひろまる俳家にもまたそれ人なからむやとて
玄々一といふ人ひとへにその例にならひて俳家か
奇行あるもの文明よりこのかた八十餘人をあつめて
ほまに座右の友となす此人咄をしたひて見る

ろすなしといへともよく古人の志に鑑
みかゝかふしてその撰に及ふ尋常明眼の人また
心識あるかにまたさとり色しや古人の
よく志る事此人ならんや雑のふへをかの色をも
季のもの梅のちりなる庵しそれ子青て子校正
上木して世に披露すまさに人のとめに
はつくかつ恭書れ志たふとむへし将又に
一読を加へまた氷黒主人よりヤおくらるる世に風雅
をともなふものの見るにおなくも吹摩を

嘉壽軒文庫

このさ称て勝敗にのこといまてもれ乾の編集なる事を
なされ三子はるゝに流俗をおてさらかな
風流をはくま俳家にたいてまさきありといふへし
ひとを請て是をよみ上件の人しれうへにまさにるに
此の三子の畸人をはなりといふへく於保由

丙子春

華亀清舞俳士

不随齋咸美跋

咸美

豊久職録

文化十三丙子年仲秋落成

江戸書林

浅草新寺町　和泉屋庄次郎
本石町十軒店　英大助
日本橋通弐丁目　小林新兵衛
同　三丁目　大坂屋源兵衛